いうことが一般的常識であると申しましたら，当時畜産課補佐の神山氏が畜産課で保存します。と牛に被害がないようにビデオテープできちんと心置きなく保存されています。

私は「百里の道は九十九里を以て中途とす」最後の１匹に時間と金がかかると強調して参りましたが、最後の１匹を見た人はいません。大城所長がダニ１匹1,000円で買いますと言ったが１匹も出て来ませんでした。バイチコールの威力に、しつっこい筈のダニがいさぎよく姿を消してしまったのです。

ダニ駆除が始って以来ＢＨＣ中毒、アズントール事件等もありましたが「終りよければ全てよし」長い間の奮闘空しからず、ここに牧野ダニ撲滅の夢が実現され、世界に誇れる偉業であることに感慨一しおなるものがあります。平成12年２月10日オウシマダニ撲滅記念式典、撲滅記念碑の建立と完結したことを関係各位と共に心からお慶び申し上げ、特に40年もの長期にわたり頑張って来られた畜産農家の皆様に深甚なる敬意を表し、八重山畜産の発展を祈念する次第であります。

オウシマダニ撲滅に寄せて

大　城　喜　光

１．私がオウシマダニとかかわりを持ったのは、昭和38年８月以降のことである。丁度その頃、伊是名村では以前から定期的にダニ駆除が月２回実施されていたことから継続して実施したのである。当時のダニ駆除薬はγ－ＢＨＣが使用されγ－ＢＨＣをガーゼーでタンポン状に詰め、牛体に塗布する方法で実施したのがダニ駆除の初体験であった。昭和40年には宮古郡城辺町新城地内の牧場で畜産技術員が総動員され横一列に隊列を組み、噴霧器での人海戦術による草地ダニ駆除の実施、昭和52年には種畜検査（牛）の関係で与那国町、竹富町の各離島を巡回する機会があり種雄牛の検査と牛体ダニの寄生状況を観察することができた。地域や個人差はあるものの牛体ダニの附着状況は吸血成ダニから若ダニまで多数の寄生があり、ダニ駆除事業は日暮れて道遠しの感を抱いたものである。昭和53年４月からは、ダニ駆除事業と本格的に取組むことになって痛感したことは守備範囲の広大さ、離島の多さ、道路事情の悪さ、交通の不便、未整備牧場など地理条件の克服にどのように対処するか又、一方ではダニの消長が一進一退しトンネルの出口が見えないため、牛は自分のものだがダニは自分のものではないなどマンネリ化傾向が、更にこれまで無料だったダニ駆除事業が昭和52年度から手数料を徴収することになった。このように悪い条件が重なった、そんな時に八重山地域で猛威を振い大きな経済的損失をもたらしていた。沖縄糸状虫症の清浄化事業が導入され疾病の性格上、短期間で一斉に１頭のモレもなく確実に投薬する必要から、畜産組合及び各部落との懇談会等で連携を密にして牛１頭ごとに投薬することから、牛の集合場所は薬浴施設のある追込場とし、投薬した牛にはペイントで標示した後直に薬浴を実施するようにしたところ、投薬の効果は顕著なものがあり、又、ダニ駆除でも成果があがり、パナリ牧場においては牛体ダニ及び草地ダニが肉眼的にではあるが確認することはできなかった。このように１頭のモレもなく確実に薬浴を定期的に実施すれば育成牧場やパナリ牧場のようにダニ空白地がダニ汚染地域の中でもスポット的にではあるが造成できるのではないかと思うようになった。しかし周囲は総てダニ汚染地帯でありダニの再侵入を防止することは困難に思えたが同島への牛の移出入は薬浴の徹底、人の出入は清浄地

からは直接可、汚染地域及び経由の場合は衣服及び履物を取替えてから立入るよう指導したその後にダニの再侵入があったとの報告はなかった。

２．このようにスポット的にではあるがダニ空白地が造成されたり、寄生ダニの個体数が減少したり、ダニ寄生牛の減少などの成果はあがったものの予断は許されない。まだまだ全体が汚染地域であり、ダニの生理生態からすれば１回の産卵で2,000～3,000個が産卵されるこれのサイクルは６～７週間隔であることから、特に牛体に寄生している３週間が重要でとりわけ前班の２週間目までは薬剤感受性が高いことから、薬浴間隔が14日までが最も効果的であり、確実に実施されることがダニ清浄化への近道であることは理解できるが、あの広大な草地から牛にダニを拾わせてこれを薬浴させ、殺ダニする単純な労働の繰返しではあるが効果は確実にあがった。薬浴や検査のたびに放牧牛を集合させるのも容易ではなく地型が複雑のところでは大勢の人間が徒歩又は騎馬での追込又は捕縄など重労働であるこの作業を２週間隔で行って来た農家等の苦労は大変なものがあった。又放牧施設の整った牧場では条件反射技術を応用してホラ貝、クラックション、バケツの打音などで給餌することによって牛を馴致し省力的に牛を集合させる創意工夫が見られた。順調に進展しているかのように見えるダニ駆除事にも沢山の問題を抱えていた。永年継続しているうちに農家又は畜産組合員の情熱、ダニ駆除に対する温度差、農家が畜産専業だけでなく多種多様の職業を持った牧野組合又は兼業農家であった。従って牛価が低迷したり、社会環境の変化などで草地が買締などで畜産経営を圧迫、更に薬浴場での子牛の事故、そして薬効の問題、薬剤耐性ダニの出現、新しい殺ダニ薬の検討など現場からの問題点を県家畜衛生試験場にあげ直に調査研究に取組み、研究成果をフィードバックして問題点を克服しながらダニ駆除事業が効果的に推進された。この事業は前人未踏のことで現場と県家衛試が連携し幾多の困難を乗り越え情熱と信念を燃しながらダニ撲滅に取組んで来た八重山家保、県家畜衛生試験場並び企画立案から予算獲得まで事業を総括した県畜産課の努力で事業が中断することもなく継続推進されたことが世界にも類を見ないオウシマダニ撲滅事業が成功を収めることができたものと確信するものであります。

（八重山家畜保健衛生所　第２代所長）

夢にまで見たダニ清浄化

田　場　清　善

先ずは、ダニ清浄化達成おめでとうございます。

畜産に携わる者であれば、誰もが口にするであろうこれまでの労苦と長い道程に終止符が打たれたことは、地域の畜産振興に大いに寄与するものである。また、多くの研究者や行政のたゆまぬ努力が、ここに実を結んだことを忘れてはならない。沖縄本島や各離島、八重山地域にあっては、昔からダニによると思われる病に悩まされてきた。昭和初期になり、オウシマダニに寄生するバベシア原虫が原因と確認された。しかし、その間ダニ駆除については、一進一退を繰り返し牛飼いや研究者たちを苦しめてきたことは言うまでもない。近年、薬学の進歩により、ようやくダニとの付き合いに歯止めがかかり、本当によかったと思う。

ここで、私が伊是名村畜産指導員当時の思わぬ出来事を記してみたい。当地でのダニ駆除は、夏場の発生時に毎月２回各部落一斉に実施してきた。

その方法は、薬浴に使用された薬剤ＢＨＣ剤をドラム缶に溶解し、空缶（ヒシャク）で汲み上げ牛体に流しながら布切でこすり付けるというものであった。ところがその直後、各部落から牛が次々と倒れていくとの電話が殺到し、どの部落から手を付けてよいのか迷いパニック状態になった。急を用する為、とにかく水で薬を洗い流すようにと指示するしかなかった。後に、ＢＨＣ剤による中毒症状と判明した。幸いにも、１頭の犠牲もなく安堵した。当時は溶解濃度についてのこれといった指示表示も無かったと記憶している。又、八重山家畜保健衛生所当時の出来事になりますが、その頃は、八重山地域からの牛の移動、移出は告示によりダニ駆除済みの証明書がないものは、禁止されていた。にもかかわらず、心ないある家畜商が証明書不携帯のまま、鹿児島、宮崎県へ出荷した。その結果、到着地の家畜保健所からダニ付着との連絡を受けた。直ちに家畜商に全頭八重山へ引き返すよう指示した。その後、家畜商への再教育を行った事を思い出しております。

明治以前から今日まで、ダニによる被害、損失またその怖さについては本当に計り知れないものがあったであろう。私たちは、この事を歴史のひとつとして後世に伝え、また、努力を重ねてきた先人たちに対しては、ダニが撲滅した喜こびを報告し、今後一層の振興に期待するものである。

（八重山家畜保健衛生所　第４代所長）

オウシマダニ駆除の思い出

知　花　　健

八重山地域の皆様、オウシマダニ撲滅誠にお目出度うございます。

昭和48年頃から平成７年まで、八重山地域の牛体ダニ駆除、牛ピロプラズマ病の原虫（バベシアーボビス、バベシアービゲミナ）検査のための採血、草地ダニ調査など、何らかの役割で関わってきましたが、やっと八重山地域のオウシマダニが撲滅され、牛ピロプラズマ病の発生がない状況になりました。

地域の皆様が見つづけてこられた「和牛の一大生産地」の夢を実現するための環境条件が著しく改善整備された今、皆様の和牛生産意欲の高まりは、はちきれんばかりではないでしょうか。私も今皆様と共にダニ駆除に明け暮れた過ぎし日々のことを思い浮かべながら、歓喜に浸っているところであります。

私が、八重山の牧場に足を踏み入れたのが日本復帰後のことでありました。その当時、石垣市の宮良を通り越し白保小学校の手前右側に、数十頭の繁殖用種雌牛と数頭の種雄牛を放牧している八重山種畜育成センターがありました。ここでは徹底した薬浴による牛体ダニ駆除が行なわれていたので、飽血ダニは採取出来ませんでしたが、放牧地で数匹の草地ダニではありましたが採取した記憶があります。またその日の家畜保健衛生所への帰りに調査した牧場では、おびただしい牛体ダニと草地ダニを発見して驚いたことがあります。当時の畜主には見慣れた光景だったかも知れませんが思い起こすと、今でも鳥肌がたってまいります。

それから八重山の牛達が薬浴を理解する様になっ

たのは、アズントール1,000倍液による月２回の薬浴が行なわれるようになった頃だったのではないかと思います。

薬浴日になると、それを察知したかの様に薬浴槽に隣接して作られたパドックに、おとなしく誘導されるもの、パドックのまわりでめらうもの、遠くへ逃走するもの、暴れて抵抗するもの等が現れるようになっていました。苦闘のなかで実施されていたダニ駆除で農家の皆様が心身ともに疲労困憊され、皆様の中からダニ駆除事業の継続を疑問視する声が聞かれたのも、この頃だったと思います。

アズントール抵抗性のダニ出現を契機に、その撲滅手段の選択のため、竹富町黒島でバイチコールのポアオン法による最初のダニ駆除が試みられました。その結果、殺ダニ効化に優れていること、同時に草地ダニの駆除効化も顕著であることがあわせて確認された時は、股間に残されている憎き胞血ダニの傷跡をも忘れて飛び上がらんばかりに喜んだ時期もありました。

その後も、ダニ撲滅達成の今日まで、永い道のりを懸命にダニ駆除に取り組んでこられた、八重山家畜保健衛生所、市役所、両町役場、石垣市ＪＡ・竹富町ＪＡ・与那国町ＪＡ、八重山農業共済の関係者並びに農家の皆様のご苦労に対し心から敬意を表します。

おわりに、八重山地域の畜産業の発展と皆様のご繁栄を祈念申し上げます。

(八重山家畜保健衛生所　第５代・第８代所長)

オウシマダニ撲滅に寄せて

元　沖縄県農林水産部参事
多　宇　　勇

八重山の畜産界が肉用牛の改良と増殖のため大きな阻害要因として長い間の悲願であり、苦闘であったオウシマダニ及びこれが媒介するバベシア病の撲滅が、国の助成事業から28年振りに達成され、八重山地域から牛の移動制限が22年振りに解除されたことは、沖縄県が世界に誇れる偉業であるとの評価に対し、感無量の心境です。

思えば、昭和59年度から始まった、沖縄牧野清浄化対策事業で実施要領に基づき、県畜産課衛生係・県家畜衛生試験場のご指導のもと、宮古家保ではアズントール50％水和剤を使用して、多良間村でダニ清浄化を推進し、平成元年度からは八重山家保でフルメトリン製剤（バイチコール）のプアオン法により、竹富町黒島・小浜島・竹富島・波照間島等・与那国町でも清浄化を推進した。

ダニとの戦いは、ダニの生活環により「１頭もれなく」をスローガンに、これまでの甘えの構造をなくすことが先決と考え、ダニ撲滅に後がないとの危機感を持たせ、耳標の装着・牛台帳作成・グループ別に班を編成し、決められた日に一斉に駆除する人海戦術で生産者と技術者の相互理解と信頼による共存共栄の精神と、大同団結して行動した素晴らしい人達に支えられて実践したことが明るい展望が開けたと思います。

ダニ駆除推進中のエピソードとして、多良間村で牛体寄生ダニが確認されなくなって５ヵ月経過後に再寄生が確認された時の絶望感と未吸血幼ダニの草地での生存日数について、県家衛試の担当と議論したこと。与那国町で実施すべく説明会開催のため出張当日、石垣市の各牧野組合長、畜産組合長が大挙して来所し、新年度には是非石垣島

で実施してほしいとの要請に対し談判したことが懐かしく思われます。

幸いにして、清浄化推進後明るい話題が絶えない。平成10年八重山地域の農業粗生産額は、115億7800万円で、そのうち肉用牛部門は59億1100万円で全体の51％と初めて半分以上を占め、農業の基幹部門として発展している。このことは、肉用牛の生産に従事する方々はもとより、八重山郡民の大きな喜びであり、誇りでもあります。ご支援いただいた関係機関の努力に感謝しているこの頃です。

これからの肉用牛の生産振興については、国内の牛肉自給率が35％と低迷している状況に鑑み、量的拡大もさることながら、質的向上に重点をおいた改良と増殖を促進することであり、これまで先輩方が追い求め、蓄積して来た育種価を活用した基本的交配を慎重に誤りなく進めることが、市場の要求に答えることであり、価格の面でも平準価が図られ、肉用牛が産業として成り立つ姿となろう。

懸案でありました、肉用牛衛生基盤の整備も図られ、これからは、沖縄県の肉用牛がいつの日か九州を、はたまた日本をリードする先進地となることを夢みて、職員の皆様には、豊かな沖縄県に変えるまたとない絶好の機会にいま直面していることを自覚されすばらしい21世紀プランの打ち上げを期待し、輝く未来へ新たな畜産業の歴史を築くため、ご活躍を祈念申し上げます。

（八重山家畜保健衛生所　第６代所長）

オウシマダニ撲滅に寄せて

大　城　弘四郎

私は、平成３年４月より平成５年３月までの２年間、八重山家畜保健衛生所に勤務し、微力ながら八重山の牧野ダニ駆除に係わった者の１人として、此の度、畜産関係者が長年念願であった牧野ダニが撲滅され、誠に喜ばしい限りである。

長年にわたるダニ駆除は、多くの労力と費用を費やしたが、その時の時代に即して努力し、その努力や知識の集積が撲滅に結びついたものである。

特に、平成元年度より八重山における牧野ダニ撲滅事業は、島単位で計画的に、徹底的に実施し、その効果が撲滅につながったものと思われる。

私がダニ駆除事業に係わったのは、平成４年度で、八重山における牧野ダニ駆除事業の最後の島となった石垣島であったので、石垣島のダニ駆除事業について概略を記したい。

先づ、石垣島を６地区に分けて、地区毎に事業説明会を開催すると共に、石垣島牧野ダニ撲滅総決起大会を開催し、ダニ駆除事業に対する新たな決意と官民一丸となって実施することを確認し合った。

事業実施の具体的方法として、対象家畜を牛のみならず馬、水牛、山羊とし、ダニ駆除期間を平成４年10月12日より平成５年12月13日までの１年２ヵ月間で、16回（舎飼いは12回）とした。

ダニ駆除実施日程表を全農家に配布し、決められた日に実施することとし、１地区を１日に一斉に実施し、６日間のローラー作戦で実施した。

確認体制は、関係機関で構成した３名１組の６組を編成し、１日に１地区を１頭もれなく実施したかどうかを点検、確認した。

思えば、事業説明会の時、私が「皆さんが計画